

広島俳句倶楽部

令和六年五月作品集

丹後から京都へのドライブ旅行 松田裕子

六十代半ばに、友人夫婦と我々夫婦の四人でドライブ旅行をしました。車好きな夫の運転で、兵庫から丹後に入り、伊根の漁師町を散策して新鮮な海の幸をいただきました。その後、京都の中心に向かいました。皆、行きたいところがばらばらで、結局、観光地巡りになってしまいました。が、楽しい思い出の旅になりました。今は、夫も七十代半ばとなり、遠出のドライブは、体力的に無理になりました。いろいろなドライブ旅行をしてきましたが、その思い出を、これからは俳句にして残そうと思っています。

卯月波舟屋の舟のぐらり揺れ

壁と壁の隙間の先は夏の海

なめろうは若狭の海で捕れし鰯

朝焼や漁船つぎつぎ湾を出づ

丹後より京への道に虹立ちぬ

もてなしに甘酒置いて京の宿

茶畑の中の古民家新茶飲む

青柿が庵の屋根に影落とし

落柿舎出て夫と歩けり青田道

もう一度青瓢箪の前に立つ

《作品鑑賞》

ちどり

裕子さん達のドライブの旅は、丹後に入り伊根の漁師町から始まる。

卯月波舟屋の舟のぐらり揺れ
なめろうは若狭の海で捕れし鰯

四月の波により舟屋の舟がぐらり揺れている。のどかな景である。そこで食べた若狭の鰯のなめろうは極上の一品であろう。

朝焼や漁船つぎつぎ湾を出づ

大変壮快な光景である。夕方には、たくさんの魚を捕って漁船は次々帰って来るのだろう。

次は、虹に迎えられ京都へ入る。

青柿が庵の屋根に影落とし

たくさんさんの青柿が庵（落柿舎）の庭になっいて、その影が庵の屋根に落ちている。青柿の青と影の黒が対照的で、絵画を見ているようだ。

落柿舎出て夫と歩けり青田道

青田道は、裕子さんとご主人のこれからの歩まれる道を示唆しているように思う。

佐保光俊

花の山上り下りは道を変へ

經典を持つて見てゐる桜かな

村上正人

法面は桜並木となりにつけり

老夫婦杖に凭れて花見上ぐ

高尾ひとみ

窓近くまだ明けやらぬ桜かな

容赦なき花の雨なり夜の明けて

あざみ

参道のしだれ桜を見上げけり

学校の歌声聞こゆ花の昼

亜矢

白波の雁木に寄せて花曇

花時のホール子の弾くベートーヴェン

綾乃

川風に震へて河津桜かな

夕桜ふたつ重なる子の寢息

井藤希

花の岸でんでに歩く子らの列

犬の子のひたすら遊び花の塵

栄吉

家家の道陰しくて山桜

山桜トンネル出れば民家盡く

大畑恵

桜咲く墓前へ父母に会いに行く

あと何年見られるだらう桜咲く

暁子

雲白し渡船で花を巡りたり

花残る土手を下れば船泊り

すみれ

夫と行くお寺参りの花月夜

吾の頭上風に飛びたる桜葉

知佳子

髪に触れ風に乗りたる落花かな

亀の背に残つたままの花の屑

ちどり

友の家の横から上る花の山

帰り際桜吹雪に立ち尽くす

辻純江

手を振つて友の去りたる花の雨

雨降つて花の雫となりにつけり

雲雀

潜り入る枝垂桜の真ん中に

肩撫づる桜の枝よありがとう

ふじ女

花守や半裸になった男子たち

いいとこに帰つて来た子花見行く

松田裕子

名はさくら桜咲く頃生まれし子

花の頃早くに逝きし友思ふ

森口良樹

咲き初むる枝を引寄せ糸桜

名橋にサーチライトや花の闇

大原良子

川面へと零れんばかり桜かな

上島康子

山間を走る列車に桜見る

熊谷ゆり子

ぐびぐびと乳飲む子牛花万朶

桑門わかこ

下駄少し禿びてをりたる花曇

須美れい

晴天に絶え間なく散る山桜

高嶋彌代

花吹雪故郷で聞くコンサート

高梨英子

花吹雪舞ふが如くに子の抱む

民

ぼんぼりや枝垂桜の枝ゆらり

土肥律子

湯の町にふれてゆきたる桜かな

撫子

階段を上れば花に近づきぬ

みさ子

花咲いて場所取る人の此処彼処

美耶

今日の雨花の先にも懸かりをり

やす保

剪定の花ひと抱へ飾りけり

山崎桂子

信濃路の山白くなり遅桜

山野ウタ

小流れに風のありけり夕桜

墳丘墓木の芽をくぐり探し当つ

葺石に紛れて散れる椿かな

若緑国府と総社かく近き

二宮の道ぼうたんに沿ひにけり

若葉雨北の山々隠しけり

簾越し神奈備山へ道通ず

揚羽来てしばらく話聞くごとし

大乗も上座部も花満ちてをり

一乗へ三乗へ風薫りけり

称名の一筋の道緑立つ

朝の庭母の代りに木の芽摘む

川風にゆらりと揺れて藤の花

雨垂れの音や蛙の目借り時

神棚に柏を供へ夏の朝

薔薇咲いてシエラガードの名を知れり

門に入り左に梅花空木かな

葬儀より戻りて茅花流しかな

朝の風庭の紫蘭を揺らしたる

ひとしきり遊いで沈む金魚かな

未央柳車体に映る黄色かな

ふらふらことばつたんことでおしやべりす

ことごとく夕日を返す春の川

連翹のなだれを打つて揺るるなり

雨の日の佇んで見る桜かな

雨降つてなほ美しき桜かな

花の雨止まぬまま夜の明くるなり

春雨のやむ間をもののみな光り

雫れ令ひ上へ上へとちようちよかな

畦道の右も左もひばり鳴く

鶺鴒の子飛びゆく親に鳴きしきる

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

一本の花の枝持ちポーズとる

低く来て低く去りけり黒揚羽

行く雲や代田に映る耕耘機

緑雨中蜂蜜提げて友の来る

雨脚のゆるくなりたる山法師

とんぼ生れ谷川の風に乗りにけり

急坂を下りて滝に近づきぬ

閑きたる山紫陽花に山雨くる

夏草を掴みて上る裏の畑

白靴を持ちて砂踏む波を踏む

あざみ

小缶で教科書届く春休

花時の平和公園通り過ぐ

学校の塀を濡らして花の雨

切り株が山の斜面に春の雨

春の山行きも帰りも鴉鳴く

紫陽花の芽吹いてゐたる夕べかな

鳴きながら雀飛びゆく春の暮

慰霊碑の水を飲む鳥春日差

豆苗の切り株を置く日永かな

籠の鳥ブランコ落とす遅日かな

亜矢

恋の夢手放さぬぞと朝寝かな

春濤に時には令はせ句集録る

病室の祖母の手つよし夏隣

香しき吾子の息吹よ笹粽

後ろ手にカーネーション持ち子の来たる

夏晩や漁り船はや二三隻

病む君と歩けば茅花流しかな

茉莉花の通り過ぎれどなほ匂ひ

玉葱を剥けば何やら艶めかし

草原の夏に投げ出す手足かな

綾乃

おほどかに犬と濡るるや春の雨

たんばばの折節揺るる線路脇

菜の花の川原にそよぐ音を聞き

小波立つ濠の隅なる花筏

近寄りてなほも色濃き残る花

日を追うて山に紛るる残花かな

春潮の漲つてゐる土佐の海

春雨の土佐の一日を歩きたる

川辺まで一気に迫る山岩景

夏の霧晴れば近し安芸小富士

二筋の急流となる雪解かな

吊り橋に人滞る山開き

残る雪アルピニストは寡黙なり

空青し道の際まで花林檎

立枯れや雪解けの川澄みきつて

川音は絶ゆることなし山桜

夏近し黒部のダムに風渡り

白川郷源平桃に会ひにけり

山を映す代田の広さかな

校庭の白線直す夏の夕

春霞基地の向うは瀬戸の海

新緑の古刹に向かふ人の列

花菖蒲朝日を浴びて通勤す

故郷は今が見頃か花菖蒲

芍薬や去年と同じ日に咲いて

歎ひ終へ帰りの道に風薫る

風薫る酔ひを醒まして歩く道

時鳥鳴く夜寂しく目覚めけり

高速に沿うて広がる麦畑

その影に父母の墓あり大夏木

井藤希

栄吉

大畑恵

猫の子の寄り合うてをり縁の下

間伐の谷へ筍流しかな

石垣の間から垂れ蛇の衣

路長けて夕べの雨に打たれをり

花菱旧街道はここに尽く

調律の続く卯の花腐しかな

一八や読経の続く奥座敷

柚子の花法事の膳に添へにけり

八重葎つかみて沢へ下りにけり

山裾は露に包まれ鞠草

暁子

山へ行く夫と子達に蛙鳴く

里までの峠越すたび躑躅増ゆ

こしあぶら子と採る春の背山かな

屑を焼き一息ついて畑を打つ

いく度か訪ひしロードの花は葉に

遠霞道掃きをれば人寄り来

今朝も摘み春の一花を玄関に

山家着きおのおの忙し風薫る

ピザを焼き緑蔭のなか子が分かつ

山荘は男が料理山女焼く

すみれ

いつまでも飛べぬ子鴉見てるたり

薔薇園に一礼をして入る人

アーチ抜け薔薇園の鳥飛び立てり

薔薇園の一瞬の風母と受く

橋渡り棟の花を見失ふ

頃合の梅の実ひとつづつ撫づる

実梅よけ実梅見上げて歩きをり

夏菊の一つ一つに名札立つ

手の甲を返し歩かせ天道虫

白鷺と並んで川面見続ける

知佳子

故郷へ行く山の木々藤絡む

母が家の軒下に蜂巣をつくる

母と別れ帰る途中の雉子かな

米作る仲間とともに溝浚ふ

空青し男に混じり溝浚ふ

溝浚へ水車の跡を通り過ぎ

溝浚へ済みて故郷のどかなり

桐の花また一枚の水田増え

母の田を夫に習うて代掻す

夏燕水田すれすれ飛び交ひて

ちどり

川の面に雨の水輪や初つばめ

花万朶娘住む家坂の上

赤信子一片の花吹かれくる

釣をする父子に降りて桜葉

雨催ひ蕾を開くライラック

朝からの雨上りたる飛燕かな

マロニエの花にマンション建設中

木菟の咲いて海まで続く道

走り梅雨そのまま濡れてゆきにけり

過ぎし旅思い出すなり鳥賊を焼く

辻純江

びゆんと来てさつと飛び去る燕かな

早蕨を摘む煤汚れ構はずに

たんばばが湯気の間に露天風呂

虎杖の若芽をそつと摘んでをり

花の枝心地良ささう雀たち

景桜に励まされたる散歩かな

鯉幟高く掲げて子どもゆく

一面の緑の中で深呼吸

身もだえの如く穂麦の揺れてをり

田植終へ田を見つめるる人のあり

雲雀

しばらくは海にたゆたひ鳥帰る

燕飛ぶときに羽閉ぢ尾を細め

たんばの繁の飛びたる下水場

雀来て雀隠れの大中洲

畦青み田圃の水はやや濁り

貝殻の波に転がる立夏かな

山裾に母居る施設夏落葉

田植時百個のむすび握る人

花石榴ひとつひとつの花の揺れ

老鶯の都会の森に棲みついて

校門にオートバイ停め卒業式

薬ゆる洞を幼子覗き込む

缶蹴りの鬼に差したる春日かな

菜の花や兄は施設に恙なく

自撮する家族真中に入学子

桜隠降るや散歩の白髪に

握割の水面に映る糸柳

瀬の石を縫うて若鮎上りたる

万緑へ一直線にロープウェイ

一村の社へ通ず青田道

五月来て旅の便りの届きけり

風五月ピアノの蓋の開かれて

本洩れ日の揺れやすきこと夏点前

桑の実にゆるやかな坂つづきをり

川満ちて茅花流しに佇みぬ

遠ざかる人見てゐたり花海桐

雨しとど万代橋の夏柳

大樟に祭の練りの到着す

緋の袴新調されて祭の子

松田裕子

森口良樹

桑門わかこ

昼月や堰いては水を引く棚田

麦の秋旅の車窓を少し開け

腰掛くる石垣の横今年竹

夕薄暑窓開けてする厨事

五月雨や音量上げて聞くラジオ

青梅雨のぬかるみ踏んで回覧板

草に沈みラジオを友の草刈女

吾が指に止まらせてみる天道虫

位職の法話手短夏座敷

山野ウタ

人気なき校舎の桜満ち満ちて

古民家の屋根に被さる桜かな

夕暮の庭に仄かに白牡丹

山里にばつんと泳ぐ鯉幟

清流に跨りあまた鯉幟

絵筆持つ子らの頭上に鯉幟

白き薔薇アーチに溢れ香り立つ

豆飯を上手に除けて子の茶碗

大原良子

新樹分け御堂の道の続きをり

久方に新樹の下に友と会ふ

里人の老いて新樹の風受くる

芍薬の蟻を払ひて籠に生け

留守宅に胡瓜の苗を置いておく

茄子苗に水遣りづく夕べかな

紀英子

階段に盛りの杜鵑花並べたり

世界より贈られし薔薇今咲けり

新緑に母校の赤き屋根が見ゆ

若葉風息を切らして坂上る

新樹道抜ければ古き校舎かな

葉桜や友と御堂を訪ねたる

樫子

蜜蜂の真似をして鼻近づけり

公園に着けばふはつと薔薇香る

何色が好きか尋ねて薔薇の園

黄の薔薇の前を何度も行き来せり

薔薇嗅いで子は顔歪め母笑ふ

ひと休みベンチに座せば野薔薇咲く

山崎桂子

薰風や窓の掃除の掃りて

新緑の匂ふ連休明けの朝

自転車のギアを上げたり青嵐

呉線の停車駅から見るダリア

白鷺や我の近くに佇みて

上島康子

国生みの島に見てゐる彼岸潮

あらはれし渦に船寄す遅日かな

行人となりたる町に夏燕

ぬかるみに足跡残る春の野辺

古き本読みたる夫や春深し

熊谷ゆり子

どの家も春の草花真つ盛り

車寿なり春日に向かひ二拍せり

山間を連なり泳ぐ鯉のぼり

空泳ぎ川を泳いで鯉のぼり

満天の青き空なり夏日なり

須美れい

藤波や子らの作りし砂の山

母の日に送られてくる赤き花

柚の花の風を厨に入れにけり

麦秋のゆるりと筑紫次郎かな

この町は夏鶯の訪ふ処

高嶋絹代

山里の家それぞれの桜かな

次々と崩す正座や花筵

一枝の木の芽の香る厨かな

花蔭この坂越せば海難碑

雑踏に吞まれてゆくも五月かな

高梨英子

永き日の二つ隣の墓仕舞

母の日の雨降る午後や俳句詠み

夏空へ鉄線の蔓絡まりぬ

芍薬をコップに挿して雨の午後

南風や溜つた書類断捨離す

土肥律子

菜の花に紋白蝶の舞ひ降るる

竹藪に竹の子さがし歩を進め

階段を上り石楠花見下ろせり

梅の枝ゆすつて青き梅落とす

河原静子

揃ひたる早苗の間走る機器

畦道のおちらこちらに余り苗

武者兜すこし斜めに飾られて

民

子供らの課外授業や田を植えて

草刈を終へて牛舎に日の差せる

飲み友で野球してをり夕薄暑

みさ子

水田を一直線に燕どぶ

客人の去りし仏間や春の暮

満開の満天星に雨降り頻る

美耶

緑立つ園にマリンバ響きけり

夏に入り檜のまな板匂ひけり

庭の隅大葉出揃ふ雨あがり

やす保

令和六年四月度作品集より

あざみ 私の選んだ十句

彼岸会の笹に吹く風歩きをり	佐保光俊
芍薬の一輪づつに風吹けり	村上正人
生きてゐることの嬉しき春日かな	高尾ひとみ
ピアノ弾き子の帰り待つ春の夕	亜矢
溜息も欠伸も混じる花疲れ	栄吉
倒木に亀一列や春の池	暁子
春の旅初めて子だけ乗る電車	すみれ
川風を背ナより受けて花浴ぶる	知佳子
幼子の苺摘みては頬張りぬ	ちどり
時刻表膝に広げて春の旅	高梨英子

ふじ女 私の選んだ十句

彼岸会の笹に吹く風歩きをり	佐保光俊
傘を閉づ盛りの花を前にして	村上正人
億万の木の芽こぞりて天を指す	高尾ひとみ
地下街に雀来ている四月かな	井藤希
イヤホンを外す夜道や初蛙	栄吉
開け放つ母屋と納屋と夏近し	暁子
昼月や縄れ合ひたる鳶の恋	辻純江
恋猫の裏木戸開くる音のして	松田裕子
轉に植ゑ替へてゐるポット苗	山野ウタ
牡丹を剪つて魔力の失せにけり	桑門わかこ